

私の リサイタル

チェロ奏者・作曲家

平井丈一朗さん(58)

(東京都渋谷区)

住まいは東京とワシントン。演奏会、指揮、公開講座、音楽祭芸術監督……と世界を飛び回る。

昨年ポーランドのアウシュビッツで日本人として初演奏。満員の聴衆は巨匠ガザルの愛弟子が世界平和を祈念して奏でる弦の調べに「涙を流し聴き入ってくれました。感じてもらえるものがあったのでしょ。」

伴奏の女性ピアニストに招かれ1週間に5回も彼女の家族と食事を共にした。更けゆくアウシュビッツの夜、語り合ったのは「戦争と平和、国家

と世界の将来、子供、夫、食物、音楽、スポーツ」と、際限なかった。

「いろんな国でいろんな人といろんな話をします。それも、生活のお

とを心掛けている。「日本のサクラ、それを追いかけて、欧米では草花が一斉に咲き競うのです。生きる喜びを感じながらゆっくり歩きます。これが

演奏と作曲

気分転換兼ね ゆっくり歩く

いがいつぱいの家庭の中で。これが楽しい。頭の切り替えになるのです」

大きなチェロを操るハ

ードな演奏、飛行機や列車を乗り継ぐ長距離の移動。しかし足腰の鍛錬はおろそかになりがちで、気分転換を兼ね、歩くこ

また素晴らしい」

佐藤春夫、大木惇夫、勝承夫たちの叙情詩を愛

読するのは、細やかな弦のしなりのように繊細な

音楽家の脳細胞がなせるわざなのか? しかし、一番のリフレッシュは、というところ「チェロの演奏



と、作曲の仕事を両立させていること」にあるという。つまり――

「演奏は楽譜を覚える

ことから始まります。ほかの作曲家の曲を何千と暗譜するのです。しかし作曲は反対に、記憶している曲を全部忘れること

から始まるのです。覚えること、忘れてしまうこと、この相反する二つの仕事をしていることが私の健康の秘けつかも知れません。ストレスはたまらないのです」

25日東京文化会館で指揮する「星条のアレルヤ」は作曲のほか作詞も自分で手掛けた、リフレッシュのたまものだ。(書)